る。この厚さの違いから、プレス成型時や焼成時に掛かる圧力が不均一になり、熱が加わると密度が低い部分が過剰に収縮し、湾曲が生じたのだ。

この問題をクリアするために、プレス機の圧力をコントロールすると共に、型を一から製作。反りを計算に入れ、あらかじめ砂時計状にたわませた成形型を内製した。こうした細やかなチューニングは、長年培ってきた技術やノウハウがあったからこそ。釉薬にも廃棄グラスウールを使用しており、理想的な釉だまりを創出するために、幾度も配合を変えて流動性を調整した。

「初期の試作段階では釉薬がうまく溶けず、綺麗なグラデーションが生まれませんでした。より融点を下げ、釉薬が中央へ流れやすくするために、最終的に2%だけバージン原料を加えています。リサイクル率は98%となりますが、何よりもビューリーさんが描いた完成イメージを優先すべきだと判断しました」(笠井さん)

開発の途上では予期せぬ副産物もあった。分厚く施釉された釉薬の層に「貫入」と呼ばれる細かなひび模様が無数に現れたのである。ジェームスさんは「これだけ釉薬層が厚くなれば当然起こる現象ですが、当初は想定していませんでした。けれど焼き上がった試作を見て、無理に消すのではなく、むしろ工芸的な美しさとして受け入れるべきだと感じました。特にオリーブのカラーは、貫入が植物の葉脈のように映り、一枚いちまいが全く異なる豊かな表情を持つようになったのです」と話す。大量のタイルを巨大なガス窯とコンベアで一気に焼き上げるのとは違い、一枚ずつに短時間で熱を通す焼成方法はウールとの相性が良く、今回の開発にポジティブなシナジーをもたらした。



今年3月3日から6日まで東京国際展示場で開催された建築・建材展での様子。什器や壁面の一部に「ウール」を貼り巡らせており、実際の使用感を表現した

素材開発とデザインが創出するタイルの未来

数々の課題を乗り越えて完成したウール。お披露目のため、什器にタイルを貼った際、その立体感とグラデーションの重なりに圧倒されたという。ジェームスさんは、「物理的には薄いタイルであるはずなのに、有機的なタイルの造形と釉薬の層が重なり合うことで、奥へと吸い込まれるような、不思議な視覚効果が生まれていたのです。この深みと立体感は、ぜひ実際の空間で多くの人に体感していただきたいですね。無釉タイプもまた、素材本来の質感が陰影となり、非常に美しい仕上がりです」と手応えを語る。

笠井さんは、安定した生産体制の構築や、強度の特性を踏まえた適切な施工方法の提示、運送時の割れに対する懸念を払拭することを目先の課題としつつ、「低温焼成や廃材活用という手法は、まだまだ伸び代があります。タイルの既成概念を壊す挑戦を続けていきたい」と意気込みを語る。

「ジェームスさんのように業界の外から純粋にデザインの理想を突きつけてくれる存在がいるからこそ、新たな知見やブレイクスルーが生まれました。デザイナーがこだわり抜いたイメージを形にするプロセスを通じて、メーカーの技術も共に育っていく。そのような相乗効果を経て、タイルの未来をもっと面白くしていきたいです」(笠井さん)

資源や産業廃棄物という問題定義から出発し、デザイナーの情熱とメーカーの技術力によって生まれた「ウール」。一つひとつに伝統的な焼き物への敬意と、地球環境への配慮が込められたタイルは、単なるマテリアルの枠を超えた付加価値を空間にもたらすだろう。

「Uool」の製作過程



ビューリー薫ジェームスさんが手掛けた初期レンダリングイメージ図(1)を元に、型を製作。エクシィズが配合した原材料(2)を成型(3)している。焼成後に直線を表現するため、両サイドを少し内側に凹ませていることが分かる。施釉タイプは、釉薬を吹き付けた後(4)、電気窯により低温度かつ短時間で焼成する(5)

ARITA-SCAPE by ARITILE

有田焼の美しさを空間装置へと拡張する

鮮やかで繊細な絵付けと奥行きある釉薬の表情が美しい有田焼は、日本で最初につくられた磁器と言われており、400年を超える歴史を持つ。近年、その技術や表現をインテリアのスケールへ拡張しようとする動きが生まれている。金照堂が展開するタイルブランド「ARITILE(アリタイル)」は、その試みを更に立体演出へ押し広げるプロジェクトとして、今年3月に「ARITA-SCAPE(アリタスケープ) by ARITILE」を発表した。磁器製のカップ状ユニットを連ねてパーティションや什器を構成するもので、照明や家具、更には建築、ランドスケープへの展開まで見据えている。金照堂代表の金子真次さん、アリタイルブランドマネジャーの山口博之さん、そしてARITA-SCAPEのデザインを手掛けた落合守征さんに、制作の背景と実用の可能性を聞いた。

取材・文／金子紗希　写真提供／金照堂(特記除く)


金子真次さん
金照堂


落合守征さん
落合守征デザイン
プロジェクト
ARITA-SCAPE
デザイナー


山口博之さん
ARITILE
ブランドマネジャー


▶ さまざまな表情を持つ有田焼のユニットを積み重ね、新たな空間装置を提案する「ARITA-SCAPE」。有田焼ならではの高い耐久性や耐火性、防水性に加え、光を柔らかく反射することで生まれる質感に着目した。家具としての機能性と、光や影と呼応する彫刻的存在感を同時に成立させ、環境と相互に作用しながら風景を生成するマテリアルとしている。有田焼の可能性を食器から空間演出へと膨らませるブランド「アリタイル」から派生しており、壁面演出から立体演出へと表現の領域を広げることを企図した(撮影／志摩大輔)

工芸の新たな市場を切り開く

佐賀県有田町の卸団地「アリタセラ」に実店舗を構える金照堂は、有田焼の企画・販売を手掛ける商社として、現代表・金子真次さんの両親が1961年に創業した。転機となったのは、有田焼創業400周年の節目だった2016年。それまで培ってきた窯元とのつながりを基盤としながら、金子さんは"新しい有田焼"の表現に挑もうと「鱗 Lin japan」を発表。メタリックな光沢をまとう器やカップはまるで金属製のようで、「磁器とは思えない有田焼」として注目を集めた。

「国内市場での売れ行きに手応えを得た後、佐賀県が進める米国市場開拓推進事業に参加し、ニューヨークの見本市『NY NOW』にも出展しました。しかし、最初の結果は振るわず。心が折れそうだったのですが、プロダクトを見た現地のデザイナーが『鱗のような表現は食器よりもインテリアに向いているのではないか』と意見をくれたんです。有田焼は近世のヨーロッパの王侯貴族に愛された工芸品として知られていますが、それは彼らの美意識に合わせて形やサイズ、絵柄、配色をアレンジしていたからこそ。先祖たちがそうして市場を切り開いてきたように、この一言をきっかけに、インテリアとしての可能性を考えるようになりました」(金子さん)

有田焼の技術を集約した生産体制

2021年、金子さんは以前から交流のあった

山口博之さんをブランドマネジャーとして迎え、有田焼の伝統的な加飾技法をベースにしたアートタイルブランドであるアリタイルを立ち上げた。有田出身の山口さんは、空間演出や照明メーカーの立ち上げ、ブランディングなどの業務を経験した後に独立した。「食器業界や有田焼の産業を外から見てきた視点を活かして、地元に貢献したかった」と山口さんは話す。

「インテリアと有田焼をつなぐブランドの方向性を考えた時に、平面で比較的つくりやすく、歪む可能性が少ないタイルが、まずは最も合理的だと考えました。加えて食器の場合、各窯元がそれぞれの釉薬や技術を競争力の核としているため、それらを横断的に組み合わせることはタブーになりますが、タイルならば、窯元同士が競合せずに参加できます。産地全体の技術が自然と集まりやすく、有田焼の産地に食器とは別にもう一本の売上の柱をつくれると思ったんです」（山口さん）

しかし、有田焼でタイルを生産することには、構造的な難しさもあったという。建材としてのタイルは、何百、何千㎡という面積に同じ品番を貼る前提で、1㎡当たりいくらという世界での勝負となる。一方、有田焼は分業制かつ小ロット多品種・手仕事が前提であるため、そのコスト構造や設備は美濃焼などタイルを手掛ける他の産地や工業タイルの生産フローとは根本的に異なるからだ。

そこで2人は、「空間を彩る素材として有田焼を活かす」という原点に立ち返り、平面タイルの先にある立体表現を模索し始めた。そのタイミングで出会ったのが、空間デザイナーの落合守征さんだった。

有田焼“そのもの”を空間に立ち上げる

落合さんは、「この話をいただいた時にまず考えたのは、素材そのものの可能性をどう空間に翻訳するかということでした」と語る。土地に息づく潜在的な価値を見いだし、デザインによって顕在化させるプロジェクトを数多く手掛けてきた落合さんは、依頼を受けて有田を訪れ、泉山の陶石採掘場や工房などを巡った。そこで目の当たりにしたのは、自然素材、そして手仕事固有の力だった。

「石が砕かれ、粉になり、粘土になり、釉薬をまとい焼き上がった磁器を見た時、透明感と、工業製品にはない微細な表面の揺らぎに圧倒されました。その力強さをピュアに表現するため、今回のプロジェクトでは何かを過剰に加えるのではなく、有田焼そのものの質感、透明感、揺らぎを主役として空間を立ち上げることが最も効果的で、産業の未来にとって意義があるのではないかと感じたんです。また、食器の産地であることをきちんと記憶させる意味でも、カップのように手になじむ形状をベースにしたいと考えました。それらを垂直方向に連ねていけるユニットとして設計したのが、ARITA-SCAPEです」（落合さん）

カップサイズであれば、大きな窯を持っていない窯元も既存の設備で対応でき、生産性も上がる。つまり、金照堂がタイル事業で掲げていた産地全体で関われる構造が、ここでも可能になるのだ。

“揺らぎ”をデザインするカップ状ユニット

ARITA-SCAPEのカップ状ユニットは、有田焼が長く担ってきた「器」の記憶を宿す、縁の立ち上がった立体が張り出した鉢植えのような形状をしている。上部にわずかな段差を設けることで、釉薬の透明感や陰影、表面の揺らぎを際立たせる設計だ。しかし実際には、釉薬を掛けて焼成すると、その厚みによってエッジが丸まり、狙った陰影が出にくくなるという課題があった。

金子さんは、「落合さんには、釉薬の厚みまで考慮して図面を書いていただいていました。ただ、焼き上がったものを見ると、想定していたほど陰影が出ず、全体として少し単調な見え方になってしまったんです」と振り返る。

「通常ならば半年以上掛ける工程を、今回は出展の都合により3カ月で仕上げることとなり、新たに型を起こす時間もなかったため、焼き上がった磁器にかんなを当てて段差部分を削り出すことにしました。結果的に、釉薬による緩やかなアールと、エッジへのこだわりが折衷された造形になったと思います」（金子さん）


SQUARE（2021年）


SQUARE PATTERN（2023年）


BORDER（2025年）


HEXAGON（2025年）

ARITILE コレクション

アリタイルは、ラグジュアリー市場に訴求することを意図して企画されたアートタイル。形状に加えて、見る角度によって表情を変える「Lin（リン）」など、さまざまな仕上げを展開している。一枚ずつに抽象絵画を思わせる色彩やモチーフを施しており、有田焼の伝統に支えられた技術とモダンな装飾による表現を提案する

ARITA-SCAPE by ARITILEのデザインストーリー


1


2


3


4


5

ARITA-SCAPEのデザインを手掛けた落合守征さん（落合守征デザインプロジェクト）は、ライフワークとして「ものづくりの未来につながる取り組みを大切に育てていく」ことを掲げている。今回も、有田焼を支えてきた泉山磁石場の視察（1）から始まり、産業全体の状況や製作過程を視察した後、ARITA-SCAPEが地域にもたらす意味や意義を踏まえてデザインを進めた。立体の形状は、有田焼の魅力を最大限に引き出すため、釉薬の濃淡や陰影が効果的に表現できるようよう凹部にこだわっている（2）。また、内側にも釉薬を施しており、器を手掛けてきた繊細な有田焼らしさを細部にまで宿らせている（3）。出来上がったアリタスケープを新たな空間装置として表現するため、ユニットの積み重ね方はCGや模型を通して検討が繰り返された（4 5）。なお、ユニットの内部には金物の支柱を通しており、接合部分のゴムパッキンで連結している

ユニットを積み上げると、釉薬の濃淡や陰影が節のように現れ、竹を思わせる有機的なリズムが生まれる。設計者の意図と職人の感覚、その往復の中から導かれた形だ。

色の配列もまた、“揺らぎ”を前提に設計されている。落合さんは、縮小模型から実寸に近いものまで200を超える模型を制作し、コンピューター上でシミュレーションしては組み直す作業を繰り返した。

「規則性とランダム性、そして焼き物ならではの偶然性がどのように響き合えば、空間に心地良い揺らぎが生まれるのか。色や形の連なりが呼吸するように感じられる均衡点を、自分の身体感覚と照らし合わせながら、探っていきました」（落合さん）

現在は16種類のユニットを6軒の窯元が分担で製作しており、70種類以上の釉薬のバリエーションを展開。生地の段階まではアリタイル側で一括製作し、各窯元へ配布して釉薬を施す分業体制を採用している。素焼きの後、本焼きを施すが、その際にどうしても収縮の個体差が現れてしまう。そこで、今回の依頼先は、有田で一般的な還元焼成の窯元のみとした。それでも生じてしまう1、2㎜程度の個体差は、内部の金具とゴムパッキンによって吸収している。

眠る技法を、呼び覚ます

ARITA-SCAPEは、完成形に固定されたプロダクトではなく、空間の条件に応じて編集可能な磁器による空間システムである。現在はパーティションとして展開されているが、その本質は自立する支柱システムにある。1本の支柱として見ればコートハンガーや照明スタンド、スツールの脚にもなり、短いユニットだけで卓上パーティションを構成することも、天井から吊ってインスタレーションのように配置することも、屋外にオブジェとして設置することもできる。また、ユニット単位の構成は実装面での強みにもなり、一部が欠品となった場合でも他で代替しやすく、欠けた場合も交換できる。更に、釉薬や表現は、設計者のコンセプトに応じてカスタマイズする余地も大きい。金照堂は、特注に対応することで切り開かれる、有田焼の更なる展開にも期待する。

「産地には門外不出のさまざまな独自技法がまだ数多く眠っています。『海辺の施設に合う表現はないか』といった相談をいただければ、継承されてきた技法から適したものを探し出し、現代の空間に適したデザインで採り入れることもできます。そうして窯元の技術を呼び戻すことが、職人たちの新たな誇りとなり、事業の継承にもつながっていくと嬉しいですね」（山口さん）

工芸を空間へ持ち込む試みは、これまでも存在した。しかしその多くは、“装飾”としての引用に留まってきた。ARITA-SCAPEがユニークなのは、生産構造そのものを空間づくりへと引用している点だ。小さなユニットであること、複数窯元が参加できること、揺らぎを許容すること、交換や補修が可能であること。それらは全て有田という産地が長年培ってきたものづくりの仕組みそのものでもある。ARITA-SCAPEを起点に、有田焼は今、食卓から空間へ、平面から立体へ、産地から建築・ランドスケープへと、その射程を少しずつ広げようとしている。


▶ 今年3月に東京国際展示場で開催された見本市「ジャパンショップ 2026」での出展の様子 ARITA-SCAPEは、同展示において、多くのインテリア団体が参加するIDM（Interior Design Meeting）が主催するアワード「IDM AWARD 2026 最優秀賞」を受賞した（撮影／志摩大輔）

商店建築

7
2026

SHOTENKENCHIKU MONTHLY MAGAZINE OF STORE DESIGN / INTERIOR / ARCHITECTURE 2026 Vol.71 No.07

Special Feature

マテリアル特集／
タイル and more...

Special Feature

「複合開発」最前線

大井町トラックス／ニュウマン高輪　ミムレ
MoN Takanawa／ベースゲート横浜関内

